

「固有種と外来種」

固有種とは、特定の地域や国にのみ自然に分布している生物のことを指します。その地域の特定の環境条件に適応しながら進化してきたため、多様な生態系の中核となる存在です。たとえば、ガラパゴス諸島のフィンチやオーストラリアのカンガルー、日本のトキなどが固有種に該当します。

一方外来種とは、人間活動や自然現象によって本来の生息地から移動し、別の地域に侵入した生物種のことです。これには動植物、昆虫、微生物などが含まれます。外来種は侵入した地域で固有種や生態系にさまざまな影響を与え、場合によっては深刻な環境破壊を招くこともあります。

その一つとして外来種が固有種を捕食してしまい、固有種が激減して絶滅するケースがあります。具体例では オーストラリアにはノウサギが侵入し、現地の植物や草を食べ尽くしました。

太平洋の島グアムでは、外来種のヘビであるブラウンツリースネークが固有種の鳥類や餌となる小動物を捕食し、多くの種が絶滅危機に陥りました。

外来種が固有種と食料や住処をめぐる競争し、固有種が生存環境を奪われるケースがあります。日本固有の在来種であるカンサイタンポポなどが、外来種のセイヨウタンポポと競争に負け、分布域を縮小させています。アメリカからヨーロッパに侵入したアメリカザリガニが、現地の固有種のヨーロッパザリガニと競争し固有種を押しつけている例もあります。

外来種が病原体や寄生虫を持ち込み、固有種に感染症を広げる場合があります。グローバルな貿易の拡大により、カエルツボカビ病原体が拡散し、これにより多くの地域の固有種が絶滅しました。またハブに感染する外来寄生虫が沖縄の生態系に大きな影響を及ぼしています。

外来種が環境を物理的に変化させることで、固有種が生息できなくなる場合があります。ミシシippアカガメは日本各地の川や池に侵入し、食害や環境変化により固有種のニホンイシガメの生息地を減少させました。ホテイアオイ（アフリカ）は熱帯地方で水辺に急激に繁茂し酸欠状態を作り出し、現地固有の生物を死滅させました。

外来種の侵入は生物多様性を減少させ、食物連鎖や生態系全体のバランスを崩壊させる原因となり、固有種が世界的に絶滅することもあります。たとえば、ニュージーランド特有の鳥類「モア」は人間と外来種（ネコやイヌ）の捕食によって絶滅しました。

さらに外来種は生態系の変化を通じて農業や漁業などの産業に悪影響を与えることがあります。国際貿易や輸送の拡大により、意図せずして生物（昆虫や植物の種など）が人間の手で広がることもあり、国際的な課題となっています。